

鎮痛薬の効き具合 遺伝子の差が左右

都医研など解明 適量判断へ一歩

同じ量の鎮痛薬を使っても、患者によってよく効く場合とそうでない場合がある。そうした「感受性」を決める遺伝子の違いを東京都医学総合研究所などのチームが突き止めた。適量がわかるような遺伝子検査が実用化されれば、強い痛みに悩むがん患者らに朗報となりそう

だ。

強い痛みを鎮めるには、フェンタニルやモルヒネなどの医療用麻薬が使われるが、適量に5〜10倍の個人差がある。投薬量は試行錯誤で決められ、痛みが十分に取れないなどの問題がある。チームは、痛みの強さを比べやすいあごの骨を切る

手術を受けた患者360人のゲノム(全遺伝情報)を解析。手術から1日後までに必要な鎮痛薬の量に、2倍の差が出る遺伝子の変異を見つけた。

日本疼痛学会理事で日本緩和医療学会理事長の細川豊史・京都府立医大教授は「一人の体で結果を出したことに意義がある。適当とみられる量を予測し、安心してがん患者に使う個別化医療が可能になる。慢性疼痛の患者では、依存しやすいかを見分けることが重要。大きな一助となる」と話している。

(辻外記子)